

政策提言「東北復興博覧会」研究会 中間発表 「国際博覧会運動のこれからと連携の可能性探求」

○金田 秀一（株式会社アサツー ディ・ケイ）

キーワード：「地球的課題解決の場」（国際博）「グリーンシティの創造」（国際花博）

【目的】

国際博覧会及び国際園芸博覧会の種別、それぞれの申請時期、他国の開催スケジュール、博覧会のトレンド等を調査し、東北復興博覧会事業が連携すべき国際博覧会の種別や開催時期を検討し、東北復興博覧会の国際博としての実現の可能性を検証することを目的とする。

【方法】

ヒアリング調査（BIE／国際博覧会事務局、AIPH／国際園芸家協会、など）及び文献調査。

【結果】

1. 博覧会のスケジュールと開催傾向

1) 国際博覧会の種別

■BIE が主催する国際博覧会は以下の2種に区分される。

- ①登録博覧会（登録博） 開催間隔／5年に1回、会期6ヶ月以内
会場面積／制限なし テーマ／一般的・総合的な内容
- ②認定博覧会（認定博） 開催間隔／登録博覧会間に1回、会期3ヶ月以内、
会場面積／25h以内 テーマ／専門的な内容

※以前は「一般博」と「特別博」に区分されていたが1998年に改訂（なお国際博を開催した国は、次回開催まで15年間の非開催期間がある。日本での開催可能性は2021年以降）。

■AIPH が主導する国際園芸博は、各国代表の参加による国際的園芸博覧会（A類）と国際性のある国内園芸博覧会（B類）に分類される。

①国際的園芸博覧会（A類）

・A類1 認定（大規模国際園芸博覧会）

年に1回開催可。同一国の場合は10年に1回以下。3か月以上6か月未満の会期。最低50haの規模、最低10カ国代表の参加。博覧会国際事務局（BIE）が認めた場合「国際園芸博覧会区分の認定博」として「国際博覧会＝EXPO」を称することが出来る。

・A類2 認定（小規模国際園芸博覧会）

会期は1週間以上3週間以内、最低6カ国代表の参加。

②国内的園芸博（B類）

・B類1 認定（長期な大規模国内園芸博覧会）

3か月以上6か月未満の会期、国際参加有

・B類2 認定（短期な専門国内展示会）

会期は1～3週間以内、特定の分野、専門的な内容、国際参加有

2) 過去、日本で開催された国際博覧会及び園芸博覧会

①国際博覧会／1970年：日本万国博覧会（大阪）一般博

1975年：沖縄国際海洋博覧会（沖縄）特別博

1985年：国際博覧会 国際科学技術博覧会（茨城）一般博

2005年：2005年日本国際博覧会（愛知）登録博

②国際園芸博／1990年：国際花と緑の博覧会（大阪）A1

2000年：国際園芸・造園博「ジャパンプローラ2000」（兵庫）A2+B1、

2004年：しずおか国際園芸博覧会「パシフィックフローラ2004」（静岡）A2+B1

3) 今後の国際博覧会の開催スケジュール

- ①国際博覧会／2015年：ミラノ国際博覧会(イタリア)、2017年：リエージュ(ベルギー)とアスタナ(カザフスタン)が認定博として申請中。2020年：ブラジル・ドバイ・タイ・ロシアが登録博として立候補。
- ②国際園芸博／2013年：スンチョン(韓国)、2014年：チンタオ(中国)、2016年：唐山(中国)、2017年：トロント(カナダ)、ベルリン(ドイツ)、2019年：北京(中国)

2. 今後の博覧会のトレンド

- ・ 国際博の開催地選定は、これまで万博を開催した事のない地域であることが有力なポイント。
- ・ 国際博には地球的課題の解決方法を模索する場としてふさわしいテーマ設定が重要。
- ・ 国際園芸博も園芸や花の品評会に加え、よりテーマ性を重視したものへと変容。
- ・ 国際園芸博はより開催地の都市政策や産業政策と密接なものであることが必要。

3. 東北復興博覧会に対する期待と支援

<BIE 事務局長 ホセ・ロセルタレスとの対話より>

- ・ 人が自然の脅威といかに折り合って生きていくのかという人類共通の課題に取り組もうとする東北復興博覧会構想のコンセプトは万博精神に適合している。
- ・ 日本が立候補できる2022年以降の競合状況は厳しいが、2002年のスイス博(国内博)のように、国内博であってもBIEの協力を得て開催した国際的な博覧会事業の可能性もある。

<AIPH フェアバー会長との対話より>

- ・ 日本は1990年の大阪花博をはじめ計3つの国際園芸博を成功させた国として高く評価されている。
- ・ 東北の復興をテーマに国際園芸博を開催するのであれば、エネルギーや交通、物流システム等の都市装置が、緑や花と共存する持続的な社会(=グリーンシティ)の国家的ショーケースとすべき。

【考察】～東北復興博覧会の国際博覧会、国際園芸博覧化の可能性について～

- ・ 「地球規模の自然災害からの持続可能な復興と再生」ということは全世界共通の課題であり、地震と津波で未曾有の被害を受けた東北地方はこの課題を世界と共有する場にふさわしい。
- ・ 国際博覧会事務局(BIE)及び国際園芸家協会(AIPH)は、共に今後の博覧会に対してテーマ重視の姿勢を示しており、震災からの復興をテーマとした復興博覧会構想にも賛同。
- ・ 国際博覧会、国際園芸博共に誘致を計画している国や地域は多く存在するため競合は避けられないが、博覧会の種別毎に申請から承認と準備に有する期間を勘案し、政府や開催自治体の合意形成づくりを行うことが重要である。

【結論】

博覧会の構想から開催に有する期間は、国際博で7～10年、国際園芸博で4～6年。それぞれの申請時期も含めて考えると2014～15年に政府、地方行政レベルの意思決定が必要となる。それを前提に開催年毎に以下の3つのパターンを設定する。

- ・ 2018～2022年：A2類+B1類国際園芸博か、スイス博覧会方式の国際的な国内博覧会の開催。
- ・ 2023～2024年：A1類 国際園芸博(+BIE認定博)の開催。
- ・ 2025～2027年：2025年のBIE登録博または2027年のBIE認定博の開催。